

平和文化研究 第40集 (2019年5月)

シンポジウム 都市の記憶 III

朱印船貿易博物館

中嶋恒治

長崎総合科学大学

長崎平和文化研究所

朱印船貿易博物館

中嶋恒治

中嶋：こんばんは。初めまして、中嶋と申します。築町の商店会の会長をやらせていただいておりますので、今日ここに立たせていただいております。今日のお話はほとんど内容をよくわかっていないまま、上籩さんがあまりに簡単に言うものですから参加しました。ただ行けばよいのかなという程度の感覚でいたのですが、いろいろお話を聞いているとちょっと俺は場違いのことを言いそうだなと、只今心配いたしております。

今江戸町の三瀬さんに熱く語っていただいたんですが、商店街としての立場で言いますと、確かに県庁移転で3,000人余り通勤する方がいなくなるということは商売的には色々マイナスの方が多いですね。

でも今お二人の先生方の話を聞いてちょっと考えが変わりました。かつて県庁から市役所の通りは、年代的に私と同じくらいの方だったらご存知だと思いますけど、いわゆる全国的な金融機関、証券会社や保険会社の支店や市役所、県庁およびいろんな航空会社の支店などがあったりして、昼間人口約20,000人と言われたのですね。そして浜の町が商業の繁華街で浜の町のついでに築町で買い物をする。あるいは県庁から市役所通り高台のオフィス街で働いている人がお勤め帰りに私共築町商店街にお寄りになって買い物をしていただくというような形で戦後、特に昭和の時代まではそれで成り立っていたのです。それがだんだんと金融機関の支店が無くなりまして徐々にオフィスが減少していき、長崎県庁舎移転は最後のとどめだったのだと思います。最後の大型オフィスだった県庁、県警が無くなって、いわゆる勤め人さんが上の通りから相当数いなくなった。それが今の我々の立ち位置なのだと、お二人の先生たちの話を聞いてはっきり感じました。じゃあどうするのだということを考えた時に、今ホールを造るとかっていう話もだされていますね。しかし県庁舎の場所は先ほど李先生がお話しになってわかったように、広い一面の土地ではないですね。皆さんご存知のように段差があるのです。段差がある上にあの石垣が非常に大切でしてね、江戸初期からの海岸線の石垣ですから、これを壊すわけにはいかない。そうすると使い方がただ1万平米、2万平米という平らな土地の感覚ではないということです。だからそれを考えてやっていかなければいけない。

築町商店街としても今までのオフィスで勤めていた方が帰りに寄るといような商店街ではなくて、ちょっと違う角度で町を考え直さなきゃいけない。たまたま上籩さんが来た時にこの話に乗ろうと思ったきっかけは、ちょっと個人的なことで、私が個人的に歴史好きなものですから、勝手にこの建物を朱印船貿易博物館にしたらいって言ったのです。そしたらたまたまここに、南蛮船来港の波止場跡っていう石碑が建っていたのですね。朱印船貿易博物館にピッタリじゃないかということを改めて感じました。じゃあなぜ朱印船貿易博物館を造れと言いついたかといいますと、私は学者じゃないから正確かどうか分かりませんが、1604年から1635年までの31年間がいわゆる朱印船貿易の時代なのです。その

時日本で一番中心だった湊はもちろん長崎の港だったのです。関西の堺港とか名古屋とかそういう場所からも勿論東南アジアへ交易に行っています。

昨年たまたま 2 度ほど私はベトナムに行ってきました。ベトナムのホイアンという日本で言えば京都みたいな町全体が世界遺産になっている町なのです。そこに行った時に、まさに朱印船時代の長崎との貿易の証拠みたいな発掘品がいっぱいありました。改めて長崎がいかにも東南アジアの国々と貿易をやっていたかということをお願いされました。ホイアンの町に行きましたら、2017 年に長崎の本石灰町が長崎くんちで使う御朱印船をホイアンへ寄付していたのですね。そして、その朱印船のやや小型の船を作って、ジャパンフェスティバルという祭りのメインイベントにしていました。昨年が 16 年目ということで実行していたのですが、その時に朱印船を使った庭先廻りをしているのですね。まったく長崎くんちの庭先廻りと同じでした。しかも、その船には荒木宗太郎とアニオー姫が乗っているわけです。私が何故ベトナムに行ったかということ、実は築町に荒木宗太郎の子孫が 3 代目から 13 代目まで住んでいて、しかも乙名という今の町内会長みたいなことを役目としてやっていたのです。その家が私の家の 4、5 軒隣ということで、そのことがわかってベトナムのジャパンフェスティバルを見に行ったのです。

それではなぜ私が御朱印船博物館を作った方が良いと言い出したか？幸か不幸か日本の朱印船が終わったのは 1635 年頃で、朱印船貿易が始まってからだいたい 30 年ちょっとで外国へは出られなくなるんです。徳川幕府が海外渡航を禁止し大きな船の建造を禁止しました。それで外国へ行けなくなった。そして、海外渡航禁止から 30 年後ぐらいに長崎の町が全部燃える寛文の大火がおこります。江戸時代に 2 回、長崎の町は出島を残して全部の街が燃えました。木と紙で造った家ばかりですから、一度火と風が起ると町全部が燃えてしまうということで、出島以外全部燃えてしまったのですね。それでそのおかげと言いますか、江戸町から公会堂辺りまでの民家の床を掘ると、御朱印船時代の発掘品がいっぱい出てきます。江戸時代の古伊万里、波佐見焼、現川焼きから中国の焼き物、東南アジアの焼き物や金属類ガラス製品もあります。只今クアトロ・ラガッツィ展という天正少年使節の展示が長崎県美術館であってはいませんが、あそこにメルカ築町から発掘されたベネツィアガラスのコップが置いてあります。それは築町のメルカ築町から発掘された品で、かつて日本経済新聞にも紹介されました。そこからはさらに 5 つほどエメラルドを埋め込んだ金の指輪とか、ガラスの指輪とか銀の指輪とか、ポルトガル人が使っていたであろうという遺物が残っています。それと先ほど言いました古伊万里のかけらとか、古い銅銭とかです。これまで長崎市はすでに 10 か所以上の場所から同じような品々を発掘しているんです。私が一番すごいと思うのはメルカ築町ですけど。今の長崎市立図書館の真ん前に、具足屋といういわゆる武器商が江戸時代にいて、そこを発掘した時にも相当いろんな物が出てきていますし、県庁の今の新館を発掘した時も赤絵の焼き物など相当いろいろな品が発掘されています。だからそうやって今まで長崎市が発掘した焼き物類や金属類はもう長崎市の倉庫に入りきれないぐらいたくさん既に持っているのです。それは今のベトナムやインドネシア、台湾などの博物館や美術館の人からすると、ぜひ見たい物ばかりです。だから私はここを朱印船貿易博物館にしてそういう物を展示すれば、外国の博物館との交流も生まれるし、長崎の宝物として残していけるのではないかと。それが一つは町づくりにつながっていくと思うのですね。

最初に言いましたように今までオフィス街の人を相手にしていたけども、これからはそうじゃない、県外から来る人を我々の町で食事をしてもらう、買い物してもらう、そういう町の形をそろそろ考え直さなければいけないのではないかと、お二人の先生のお話を聞いていたら思いました。今更長

崎でオフィス街をあの場所に造ろうというのはほぼ不可能だと思います。現実をみますと県庁から市役所の間は、皆さんご存知のように今では高級マンション群になっています。マンション群になって住宅地になっています。いまさら50年前の姿は絶対あり得ないので、先生方のご協力を得ながら、いろいろ教えていただきながら、町づくりに励みたいと思っています。



長崎:中嶋屋本店より発掘した磁器、壺類

上菌：ありがとうございました。朱印船貿易博物館という具体的なお話をいただきました。この場所はいわゆる岬の教会からずっと歴史を重ねてきた所ですし、御朱印船貿易を見ていた場所でもありましたし、旧長崎警察署ができた大正時代は、長崎がある意味で一番栄えた時代です。第1回の国勢調査をやった時に、長崎は九州で一番人口が多い町だった。そして発展していた。その時代の象徴としてもこの建物は意味を持つ。もちろん被爆建造物としての意味を持つ。そういう重層性を生かした場所として、朱印船貿易博物館を含めた重層性を町づくりとして考えていくことが大切だと、具体的なお話を伺いながら感じました。私も最初中嶋さんにお話を伺うまでは、この辺の下を掘ると古伊万里が出てくるとか、金の指輪が出てくるとかというのは知らなかったです、すごい話だなと思いました。